

聖書：創世記 1：1～5

説教題：はじめに神が

日時：2019年6月9日（夕拝）

今夕から開く創世記の特徴は、何と言っても旧新約聖書 66 巻の一番最初に置かれていることです。新しい本を読む時、私たちはそこにどんなことが書いてあるのだろうとワクワクしながら最初のページをめくるものですが、聖書の冒頭の言葉は非常に簡潔でありつつも、強烈なインパクトをもって、読む私たちに迫って来ます。1章1節：「はじめに神が天と地を創造された。」

この最初の1節から色んなことが言えるかと思いますが、大きく次の4つのことを私たちに語っていると思います。一つ目はこの世界には「最初」があった、「始まり」があったということです。世界は永遠の昔からずっと存在していたのではありません。「国破れて山河あり」とかつての詩人は歌いました。たとえ戦争などで国がメチャクチャになっても、この雄大な自然あるいは私たちが立っているこの大地はどっしりとして揺るがないと私たちは思うものです。しかしこの大地も、私たちが生きているこの世界も、かつては存在しない時があったことがここに示唆されています。これは地球だけの話ではありません。1節の「天」と「地」における「天」は、地球から空を見上げた時の果てしない広がりをごくまでも含むものです。太陽、月、星は言うまでもなく、水星、金星、火星、木星、・・・と続く太陽系、さらにはそのような恒星が2000億個以上も含まれていると言われる銀河系、あるいはアンドロメダ銀河、その他、人類がいまだその存在を知ることさえできていない気の遠くなりそうな宇宙の果ての果てまでも、この創世記1章1節の「はじめに」という時をもって存在するようになったのです。

2番目に分かることは、神がこれらをすべて創造されたとあるのですから、その前には神お一人だけがおられたということです。そしてこのことはすべてのものは「無」から創造されたことを意味するでしょう。何の材料もないところから、神はこの「天と地」という言葉で表されるありとあらゆるものを、ご自身の思うように創造された。どうやってそれができるのか、私たちの経験から説明できることではありません。私たちのできることはせいぜい、すでにあるものを多少変形したり、組み合わせたりすることくらいだからです。しかし神は何もない状態から、すなわち「無」から「有」を生じさせられた。ここにこの神の比類なき全能性が示されています。

三つ目に言えることは、今のことから出て来る結論ですが、神はこの世界の上に絶対的な主権を持っているということです。神は誰かに助けてもらうことなく、また誰にも材料を提供してもらうこともなく、ただご自身の力によって天と地を創造し、これを支えておられるのですから、私たちを含むこの世界のすべては、この神の一方的な主権に「依存」する形で存在を許されています。

そして4番目、これが私たちに最も重大な意味を持っていることですが、この「天」と「地」にあるすべてのものは「目的」をもって造られているということです。もし私たちがただ偶然にこの世に生まれて来ただけならどうでしょうか。偶然なら、私たちは生まれて来る必要はなかったということにもなります。あなたはここにおいて良いけれども、いなくても良かった。しかし人間はそれでは生きていけませんから、何とか自分の生きる意味や目的を見出そうとします。しかしそれは所詮、人間が自分を納得させるために後からつけた便宜的な理由であるため、私たちの人生に根本的な回答を与えるものとはなりません。ところが聖書の第一ページは、この世界にあるすべてのものは神が造ったと言います。神は人格を持つお方ですので、あるお考えと目的をもってそれらのものを存在せしめた。ここに私たちが今、このようにあることの根源的な意味が与えられているのです。世界と宇宙に存在しているもので、その目的がないものは一つもないのです。

私たちはこの聖書の根本メッセージを受け止めているのでしょうか。私たちは皆それぞれ忙しく毎日を過ごしています。その生活のためにはものすごいエネルギーを使っています。しかし一体何のために膨大なエネルギーを費やしているのでしょうか。もし私たちの生活から「神」という視点が消えているなら、私たちは自分に与えられている人生の目的から全く外れた生き方をしていることになります。私たちは神から離れて歩むようには造られていません。反対から言えば、私たちが生き生きとした真に意味ある人生を送るためには、私たちの考えの中心に神がなければならぬということです。この世界は神によって存在させられたのであり、その神を脇に押しやってしまうのは、私たちは自分の生きる意味や目的を見出すことができなくなってしまうのです。

神を中心にするとは、神が中心となって私たちが奴隷にさせられるとか、自分のしたいように生きることができなくなるということを意味しません。むしろこの創造主なる

神がどんな方であるかを知るなら、この神に従い、神と共に生きるところにこそ、そのように造られた私たちにとっての最高の喜びであることを知るようになるでしょう。その神のご性質が、続く創造のみわざにいよいよ示されて行きます。2節：「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。」

1節では「天と地」と言われていましたが、2節では「地は」と語られ始めています。ここから先は「地」に焦点を当てて書かれて行きます。なぜでしょうか。それは一言で言えば、この地球が人間の住むところとなるからでしょう。神は広大な宇宙を創造し、数え切れない無数の惑星を造ったついでに、この地球も作ったというのではない。この2節によれば、私たちが住む地球は全宇宙における神のご計画の中心地です。私たちの上には神のとてつもない期待と関心が向けられているのです。

その地球の最初の状況は「茫漠として何もなく」とあります。「茫漠」と訳された言葉は、荒れ地や砂漠を意味する言葉だそうですが、水が覆っていたと記されていますから、私たちが考える荒れ地やかさばくとはまた違う状態です。また「何もない」とは「空っぽ」という意味です。植物も動物も人間もない空っぽの状態。いのちあるものが存在するのに適していない状態であった。ある人はなぜ神はまずこの状況を造られたのかと問います。一発で素晴らしい状態を作り上げることはできなかったかと。しかしこれは神の力が足りなくて最初はこれくらいしかできなかったということではありません。神はこの世界を一瞬の内に造ってしまわれたのではなく、これから見て行くように6日間をかけて創造して行かれます。この6日間とは、24時間×6という意味ではなく、ある期間を指していると考えられます。そこにはより単純な状態から次第に秩序のある整った状態へと仕立てられて行くパターンが示されています。そのように神は当初からの計画に従って、まずこの2節にあるような状況を生から起こされたのです。そしてそれはこの段階において良いものだったのです。

この地球の原初の状態の上には神の霊が動いていたとあります。これは神が力強くそこに臨在していたことを示しています。この地はやがて人間の住まいとなって行きますが、その地は最初から神のご臨在が豊かにあったのです。神がどんなにこの地に対して深い思いと関心を注いでおられたかが改めて見えて来ようです。

さてこうした状況において、いよいよ神の華々しい一連のみわざが記されて行きます。

3～5節：「神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。」　まず最初に行われたのは光と闇の区別です。この時まで地球上のすべては、2節にあったように、闇に覆われていました。その地球に生命が住むために必要なのは光です。その輝かしい光が、神のご命令によって、一気に四方を照らし出します。ここから私たちはこの天地を創造された神がどのような方であるのか、いくつかのことを学ぶことができます。その一つは神の御言葉と結果との間には少しの違いもなかったということです。3節の「光、あれ」という言葉と、その結果である「光があった」という言葉は、原文のヘブル語では全く同じ言葉で書かれています。つまり無理にでも訳してみるなら、「神は言われた。『光がある。』すると『光がある。』」となります。このように神の言葉とその結果との間には完全な一致がありました。大体イメージした通りになったというようなレベルではなく、寸分たがわずその通りになったのです。

しかしそのあまり、神があまりにも簡単にこの世界を造ったかのように考えてはならないでしょう。神が語ったことばがみなその通りになるとすれば、逆から言えば、軽々しくは言葉を発せられないということにもなります。適当に言葉を発すれば恐ろしい世界が出現してしまいます。すでに2節には、神の霊がずっと動いていたと記されていました。神は綿密なご計画と準備を経て、相当の慎重さと熟慮とをもって、この最初の言葉を語られたのです。

また4節からも神のご性質について伺うことができます。神は光を「良し」と見られました。これはどういう意味でしょう。「光、あれ」と言ってみたものの、果たしてその通りにできたか、ドキドキしながら眺めてみると、案外うまくできていた、これなら良いだろう！と、まずはフーッと胸をなでおろしたということでしょうか。もちろん全能の神にとって失敗はあり得ません。そういう意味ではあえてチェックする必要はなかったわけです。しかしこのようにあえてご覧になり、良しとされることの内に、何かを造った後に、それをただ造りっぱなしにはしておかれない神の姿が示されています。神はご自身が創造したものに深い関心を注ぎ、それを御心に深く留められる方なのです。

そして「良し」と神が見られたことにも思いを向けたいと思います。これはその辺の人がまあ良いとした程度の良しではないでしょう。これは全能の聖なる神が見て「良し」とされたものですから最高に良いもの、この上なく素晴らしく良いものです。それは良

いお方なる神ご自身を映し出す良さです。詩篇 19 篇 1 節に「天は神の栄光を語り告げ大空は御手のわざを告げ知らせる」とありますが、まさにこれから造られて行く一つ一つは、それらを造られた神がどんなに良い方であるかを賛美するものとなって行きます。神がどんな方であるかは、神が造られたこの世界と被造物の中に生き生きと刻み込まれているのです。

こうして天地創造の第一日目は光の創造とそれによる闇との区別をもって終了します。神はこれからもご自身の目から見て「良い」ものだけを造って行かれます。その一つ一つのプロセスを見て行く時、神は決して気まぐれに、ご自身の全能の力を使って遊んでみたというようなことでなく、いかに念入りな準備をもって慎重に事を進められたか、そして造った後でも一つ一つ見守り、それがご自身の良さを映し出すものであることを確認し、喜ばれたかを知ります。そうして必要なものをすべて整えた後に、最後に人間を造られたことを覚えるなら、神はこの世界に、とりわけそこにこれから住まわせる私たち人間に、どれほどの高い理想、どれほどの高い期待を込めておられるかということに恐れおののかずにいられないのではないのでしょうか。

私たちはそのような神の熟慮とご熱心と偉大な目的によって、この生を受けているのだということをしっかり受け止めたいと思います。そしてそう思うなら、私たちの毎日の生活はこの創造者なる神を中心とし、この創造主の御心に従う時に、本当の生きる意味と喜びとを回復できるのだということをもう一度わきまえる者でありたいと思います。私たちが今日ここに存在している意味は、私たちが自分の頭で何気なく考えることよりもはるかに高貴なものであり、尊いものです。その最大の幸せをなぜ私たちは見失ってしまったのか、またどうしたらその偉大な生に立ち返ることができるのか、ということ学ぶのが、この続きを私たちが読んでいく理由である、と思います。